

京都大学	博士（地域研究）	氏名	柏 美紀
論文題目	マレー世界における民族範疇再考 ーインド系プラナカンに着目してー		
（論文内容の要旨） 本論文の目的は、国家による民族分類の枠組みに収まらない人々の社会的紐帯や日常実践を臨地調査により検討することで、マレー世界の民族範疇を再考することにある。 多民族国家マレーシアは、異なる民族・宗教・文化を持つ社会集団が混合・融合することなく共存する「複合社会」(Plural Society) として論じられ、マレー系・華人系・インド系という三大民族分類に沿った社会集団論は、民族間の分断、ならびにこの分類に収まらない集団や範疇の周縁化に加担してきた。 これに対して本論文は、「インド系プラナカン」という、異なる民族・宗教・カースト・経済階層の人々からなる移民集団に着目する。プラナカン（Peranakan）とは、現地語で「子」を意味するアナック（Anak）から派生したもので、外来者をルーツにもつ現地生まれの子を指す。 本論文では、彼らのアソシエーション、共有地の管理、親族関係、宗教実践、食文化などを考察することで、いかにインド系プラナカンという社会集団が形成・維持されてきたのかを明らかにする。それにより、差異を障壁として捉える相互隔離ではなく、差異を前提とした密接な相互交渉によって紡がれる多元的な紐帯の重なりに着目し、新たなマレーシア社会論の可能性の提示を試みる。 本研究で用いた調査手法は、主にマレー語と英語による参与観察、半構造化インタビュー、文献収集である。調査期間は主に2019年から2025年にかけて合計約15か月である。調査地はマレーシアのマラッカ（特にインド系プラナカンの集住地であるA地区）、および彼らの主な移住先である首都クアラルンプールとシンガポールである。調査対象者は、A地区を共同所有するアソシエーションの代表者、A地区内の居住者と旧居住者（華人系・マレー系など含む）とその親族、およびA地区のヒンドゥー寺院に集う人々である。収集した文献は委員会の規約、活動報告書兼収支報告書、歴代代表者の記録、会議議事録、土地登記簿などである。 序章（論文の構成と調査概要）および第1章（論文の目的と先行研究）をうけて、第2章では、インド系プラナカンによる複数の定義とその変遷、親族関係、呼称などから、			

彼らが社会の変化に応じてより多様な人々を包摂しつつ自己を再定義してきたことを明らかにした。

第3章では、インド系プラナカンが民主的な組織運営によって共同所有・管理するA地区の土地と寺院を基盤としつつ、カーストや到来時期・民族・宗教・経済階層の異なる人々を包摂しながら発展してきた過程を明らかにした。

第4章では、日常生活に密接に関わる宗教実践に着目し、保守的なヒンドゥー教を核とする集団と指摘されてきた彼らは、実際には他宗教の実践を柔軟に取り入れていることが明らかになった。彼らは地縁、血縁、マレー語という共通語を通じて異民族・異教徒との関わりを強め、寺院や墓地での儀礼・祭礼を通して社会的ネットワークを強めてきた。

第5章では、日々欠かせず、かつ差異の顕在化しやすい食文化に着目して、民族・宗教的に多様な彼らの日常的な関わりを検討した。多様な人々と幼いころから日常的に交流してきた彼らにとって、禁忌をはじめとする差異は自他の境界を分ける障壁ではなく前提である。彼らの多くの家庭では共食の機会が少ないが、それは関係の希薄さの表れではなく、本音を伝え合い差異を尊重した密接な交渉の帰結と考えることができる。

本研究により、インド系プラナカン集団は1つの境界に支えられているというより、多元的な紐帯の重なり合いによって構築されていることが示唆される。民主的な組織体を基軸とし、共通言語（マレー語）を基盤としつつ、親族関係と土地運用に多様な存在を包摂させながら、柔軟に集団の定義を変化させて正当性を再編し、日常の宗教実践では差異を融合させ、食慣行においては差異を共存させ、非血縁者や非ヒンドゥー教徒も祭祀儀礼への参加を通じた社会的紐帯の維持が図られてきた。このように彼らは差異を無化するのではなく、尊重しながら集団を構築してきた結果、民族・宗教といった同質性によらない、多様性を包摂する集団が維持されてきたことを本論文は明らかにしている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、南インドからマレーシアに移民し現地女性を配偶者とした土着化ヒンドゥーコミュニティでの臨地調査を通して、国家による民族分類に収斂されないマイノリティである「インド系プラナカン」の集団性の形成と維持を実証的に検討するものである。

ヒンドゥー教を信仰し、マレー語を母語とし、華人などを親族にもつ「インド系プラナカン」は、マレーシアの三大民族（マレー人、華人、インド人）の狭間に位置する人口600人ほどの少数集団である。彼らは都市部への移住と外婚の増加により集団の維持が困難になる可能性が指摘されてきたが、実際には三大民族に収斂しない「インド系プラナカン」と自認する・他認される集団が、現在までマラッカを拠点として存在している。このような社会集団が15世紀から現在まで、いかにその集団性を維持してきたのか、いかにマジョリティのマレー社会に回収されずにアイデンティティを維持しているのか、これらの重要な問いを本研究は長期の参与観察を通して実証的に考察するものである。

本論文が果たした重要な学術的貢献は、大きく以下の三点に集約できる。

第一に、従来のマレーシア社会に関する人文・社会科学研究においては、インド系プラナカンに関する研究は歴史研究に限られ、臨地研究は存在しなかった。この意味で合計15ヶ月、計252人のインフォーマントからの聞き取りと参与観察に基づく本研究はパイオニア的な学術的価値を有する。

第二は、本研究の調査課題と民族誌的知見の蓄積にある。臨地調査においては、「民族」と「宗教」の狭間、もしくは両義的な属性をもつプラナカン社会を検討するために、「食文化」「宗教儀礼」「親族関係」に注目し、「何を食べているか」、「誰がどこの墓に入るか」「誰を祭祀対象とするか」、「誰と結婚しているのか」等々、極めて具体的かつ基礎的な調査課題を設定して、目に見える日常実践の理解とインフォーマントの応答に基づいたプラナカンの民族性ならびに民族範疇の分析を行なっている。親族関係に関しては外婚や養子縁組の実態把握を通じた分析、食文化に関しては、家庭内・寺院等における共食の参与観察やレシピ本分析から彼らがいかに「三大民族」混交の食文化を形成してきたのか明らかにし、宗教実践については、家庭内・寺院・墓所での参与観察と資料収集によって、マレー系や華人の参加をもって実践される儀礼・祭礼の詳細を明らかにした。

第三は、本論文のもつマレーシア社会ならびにマレー世界研究への貢献である。インド系プラナカン社会に関する本論文は、三大民族の分断の上に成立する「複合社会」として

論じられてきたマレーシア社会における集団形成の動態理解に資するものであり、アイデンティティ形成、多文化主義、エスノジェネシス、「民族」の可塑性などの重要な研究課題について新しい民族誌的知見を提示するものとなっている。

以上により本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものとして認める。また2026年2月4日に論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。